

# 浪江町田子平遺跡出土の縄文時代早期中葉土器の 特徴と編年的位置付けについて

三浦 武司

## 1 はじめに

筆者は、平成 20（2008）年度に双葉郡浪江町田子平遺跡の発掘調査を担当する機会を得た。その際、今回取り上げた田子平遺跡出土の土器について報文中において、器形や文様の特徴から縄文時代早期中葉頃の土器であると報告した（註1）。本資料は、遺構に伴って出土し、さらに口縁部から底部まで器形が完全に分かる形で復元することができた。また、出土した土器の特徴として、これまで知られていた該期の土器型式の範疇に含まれない特徴を有していることから、調査時より注目していた。

しかし、報告書作成時には時間的制約と紙幅の関係から、この土器に関して検討を加える機会を逸してしまった。それから数年、頭の片隅にその土器の存在を意識していたものの、検討する機会を失ったままであった。

その後、平成 25（2013）年度に福島県文化財センター白河館に異動になり、「ふくしまの宝物」というミニ展示（註2）を担当した。そこで本資料の展示を行い、改めてこの土器を観察する機会を得た。さらに近年、沈線文系土器群から条痕文系土器群に関連する資料が蓄積されつつあることから、本資料の文様の特徴や編年的位置付けについて、同時期の資料などを参考にしつつ再検討してみたい。

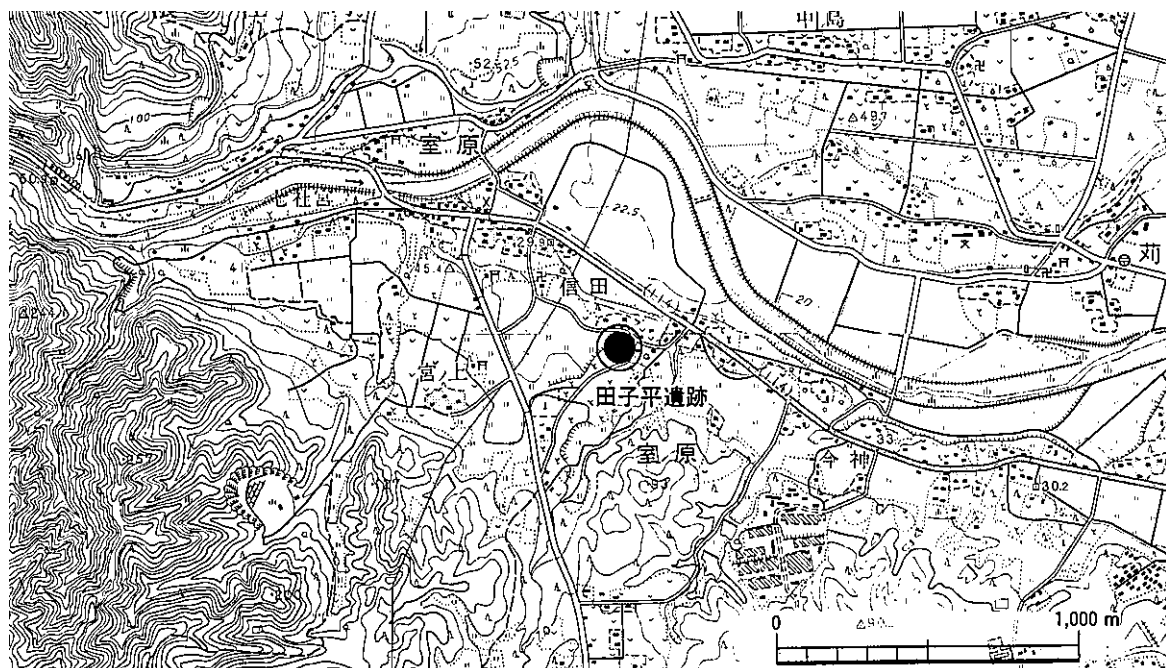


図1 田子平遺跡位置図

## 2 田子平遺跡の概要と出土土器

### (1) 遺跡の概要

福島県は東北地方の最南端に位置し、阿武隈高地と奥羽山脈に隔てられた「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」の3地域に区分されている。田子平遺跡は浜通り地方中央部の双葉郡浪江町室原字田子平に位置する。田子平遺跡は阿武隈高地に源を発し、浪江町北部を横断するように東流する請戸川南岸の段丘面上に立地する。この段丘面は南西から北東に舌状に延び、標高45～50m程を測る。段丘南は堀切川により開析され、比高差10m程の谷が遺跡南側の丘陵地と田子平遺跡の所在する段丘を隔てている。

田子平遺跡の発掘調査は、平成19・20年度の2ヵ年にわたり、常磐自動車道建設に係る発掘調査として行われた。常磐自動車道は、埼玉県三郷市を起点として、千葉県・茨城県・福島県浜通り地方を縦貫し、宮城県仙台市まで至る自動車専用道路である。

2ヵ年にわたる田子平遺跡の発掘調査で検出した遺構は、竪穴住居跡36軒、掘立柱建物跡26棟、土坑81基、埋甕57基、集石遺構3基、屋外焼土遺構3基、性格不明遺構1基である。その内、竪穴住居跡33軒、掘立柱建物跡26棟、土坑78基、埋甕57基、集石遺構3基、屋外焼土遺構3基は、縄文時代に属する遺構である。

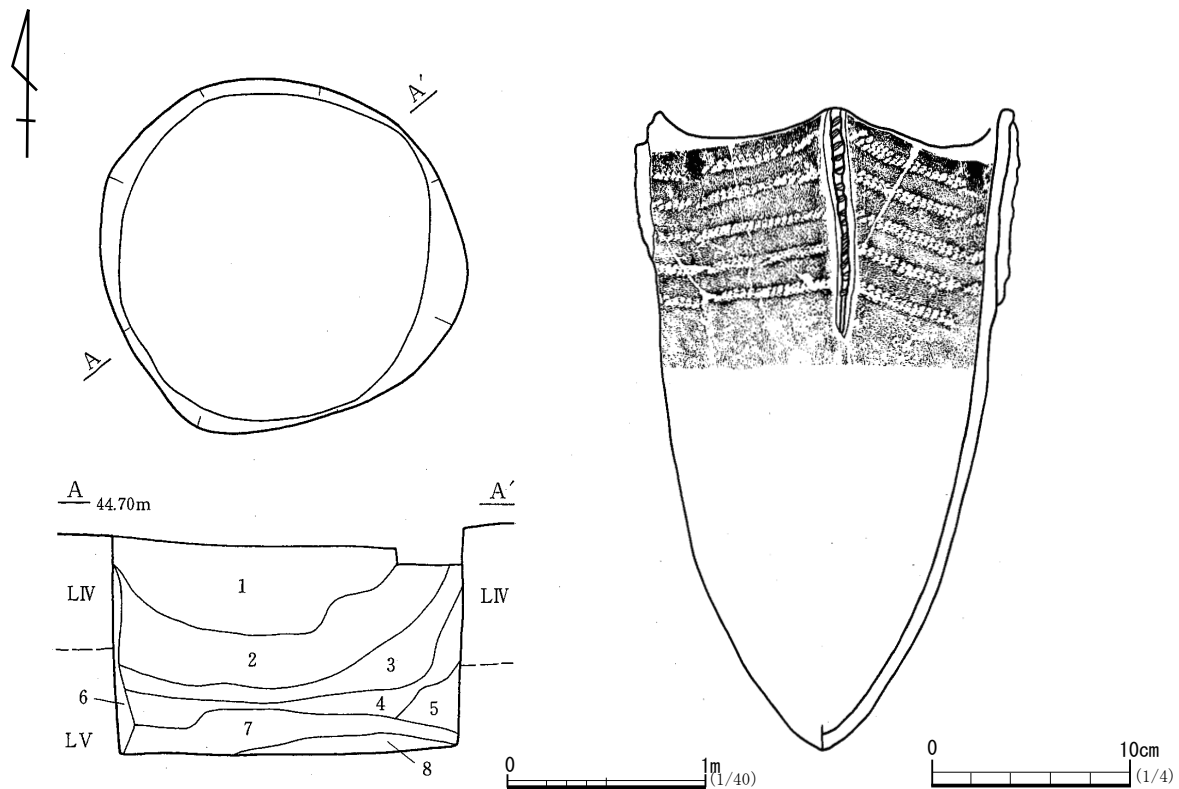
田子平遺跡の中心となる時期は、縄文時代後期中葉～末葉にかけての時期で、縄文時代の多くの遺構及び遺物は本時期のものである。本論で取り上げる縄文時代早期中葉の時期においても、一定量の遺構数や遺物出土量が認められ、田子平遺跡を生活の場として小規模な集落が形成されていたことが推定できる。その他、縄文時代前期前葉～中葉、中期末葉、晩期前葉・中葉～後葉頃の遺構・遺物もわずかに認められた。

### (2) 出土土器の概要

**出土状況** 図2の土器は、田子平遺跡31号土坑より出土した。31号土坑は、調査区北部北端の平坦面に位置している。平面規模は直径約1.7mの円形であり、検出面から底面までの深さは、約1mを測る。壁面は垂直に立ち上がり、底面は平坦に整えられていた。土坑内堆積層は8層に区分された。堆積土の下層は人為堆積で、人為堆積であった7層直上に横倒しにつぶれた状態で土器が出土した。堆積土の上層は、自然堆積である。以下では、図2の土器を主対象として、その特徴について概観していくこととする。

**器形** 口縁部から底部まで、ほぼ完全な姿で復元することができた土器である。器形は胴長のいわゆる砲弾形で、底部は尖底となる。口縁部はゆるい4単位の波状口縁で構成される。波頂部には垂下する隆帯が付帯し、波低部の口縁外面には円形の小突起が貼付されている。口唇部上に刻みはなく、口端は丸く整えられ、垂直に立ち上がる。器壁は5～7mm程の薄手に作られている。

**胎土・焼成** 胎土は、精製された粘土を用いて作られ、繊維混和痕は認められない。また、胎土中にはわずかに雲母が確認できるが、常世1式土器に見られる雲母の混入比よりも少な

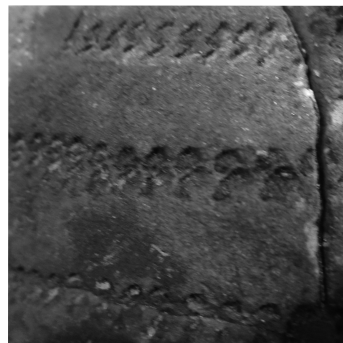


31 号土坑平面図・断面図

31 号土坑出土縄文土器



波頂部垂下降帯



絡条体圧痕文



口縁部小突起

図2 田子平遺跡 31 号土坑と出土土器

く、意識して混入しているわけではないであろう。焼成は非常に良好で、焼き締まっている。

**器面** 外面は胴部中位から下位にかけて、砂粒の移動がわずかに確認できる。胴部中位には、絡条体によるものだろうか、不明瞭であるが擦痕が観察される。また、部分的にケズリ状の痕跡も看取できる。内面は、やや不明瞭であるが擦痕が観察できる。整形具は明確でないが、横方向または斜位に整えられている。

外面胴部中位から上半には、ススやコゲの付着が顕著である。器面が黒色または黒褐色に変色している。下半には、ススやコゲの付着が観察されない。土器の使用による色調の差異と考えられ、尖底土器の使用法を考察する一助となりうる例と考えられる。

**文様** 文様は外面にのみ観察される。器体の上方3分の1ほどに文様が認められる。4つ

の波頂部より、隆帯が垂下し胴部上半近くまで貼付される。隆帯上には絡条体圧痕文が横位または斜位に刻むように施文される。さらに、波頂部から垂下する隆帯間を繋ぐようにして、絡条体圧痕文が横位5段に重畳するように施文されている。個々の絡条体圧痕文は、2条一組で施文されているが、2条同時施文ではなく、同一原体の反復施文と見受けられる。5段の絡条体圧痕文は、それぞれが隆帯から波底部までを一単位とし、横位に隣接する絡条体圧痕文と、波底部下で連結している。

### 3 類似土器群との比較

図2土器の文様の特徴として、縦位隆帯をもつこと、横位に多段構成をとる絡条体圧痕文が施文されることの2点があげられる。この2点の特徴は、本資料最大の特徴であり、かつ文様要素のすべてである。以下ではこの2つの文様要素について取り上げる。本論では、縦位隆帯を口縁部文様帯縦位区画の一形態の表出と捉えて、検討することとした。

#### (1) 縦位区画について

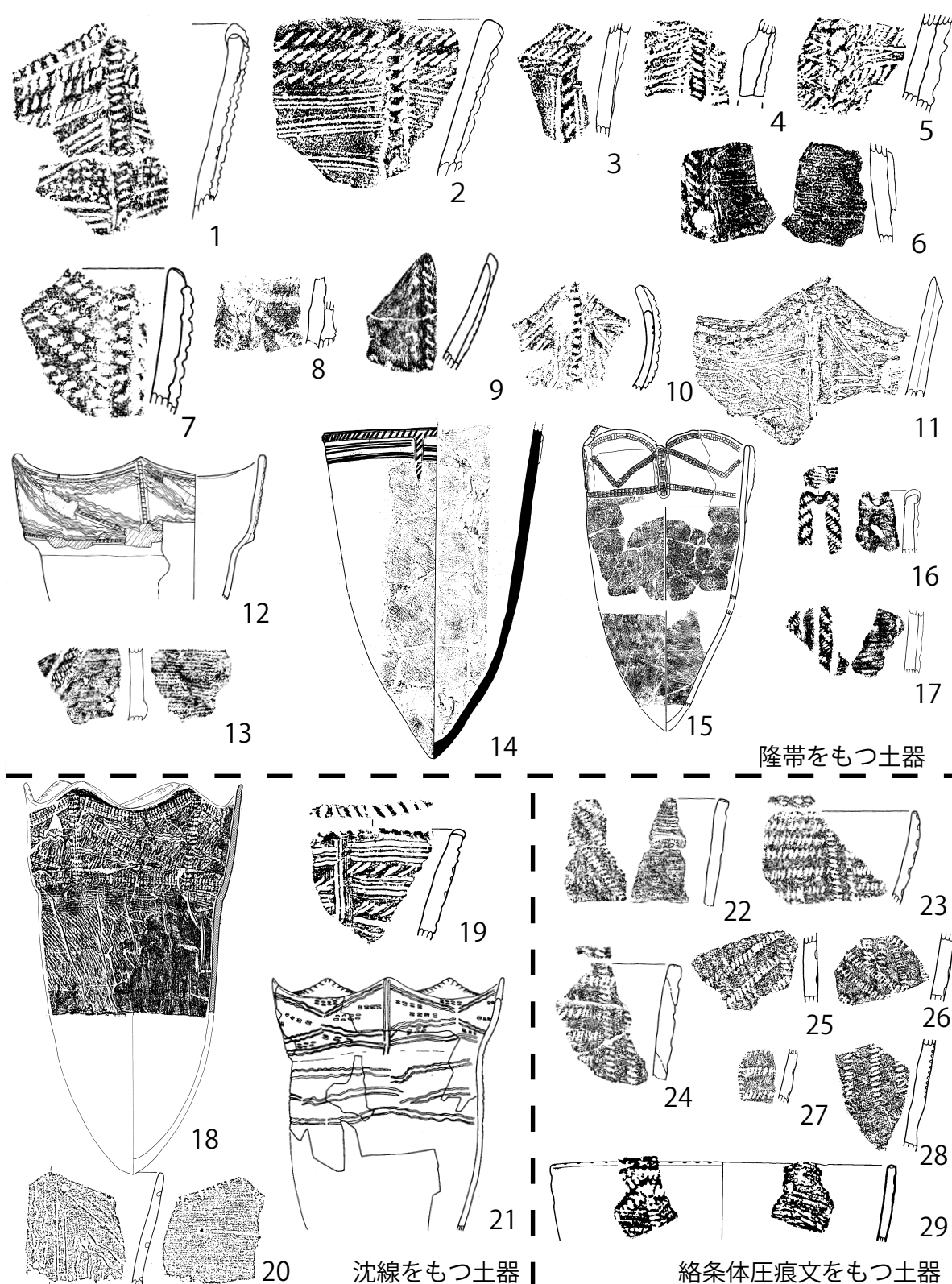
図3には縦位の隆帯または沈線、絡条体圧痕文を文様構成にもつ該期の土器を集成した。うち、図3上段には縦位の隆帯をもつ土器を掲載している。下段左には、沈線を用いて縦位区画する土器、下段右には絡条体圧痕文により縦位区画された土器を示した。以下、施文法の違いによる縦位区画をもつ土器について、各々検討していく。

**隆帯をもつ土器** 図3-1～17には、隆帯が縦位に貼付された土器を掲載した。縦位隆帯がつく部位は、口縁部または口縁部に近い胴部に限られるようである。1・2・7・9～12・14～16は口縁部資料または口縁部まで復元できた資料である。1・7・9～12は波頂部から垂下する隆帯、2は平口縁に付く隆帯である。15は波低部から垂下する隆帯をもつ資料である。

これらの縦位隆帯には、絡条体圧痕文または刺突文が施文されている。隆帯上には横位または斜位に絡条体圧痕文が刻まれているものが多いが、7・12は半截竹管工具、15は角棒状工具による2条の縦位の押引文が施文される。

1は栃木県小山市西裏遺跡出土土器である<sup>(註3)</sup>。2～6は栃木県佐野市黒袴台遺跡の資料である<sup>(註4)</sup>。1と2は平口縁と波状縁の差異があるものの、隆帯両側に施文される刺突や沈線が横位に重層する文様構成は似通う。小野町西田H遺跡<sup>(註5)</sup>出土資料中においては、多段構成となる7と山形の構成となる8が認められた。9は図2が出土した田子平遺跡31号土坑より出土した資料である。胎土や隆帯、器面の状況などは、図2土器に類似する。隆帯上には絡条体圧痕文が施文される。10～12は常葉町(現 田村市)富作遺跡出土土器である<sup>(註6)</sup>。11は口唇部に沿う隆帯も認められ、隆帯をはさんで連続する刺突が施文される。12は口縁部文様帯直下に強い屈曲を有する資料で、口縁部を4分割する垂下隆帯と波頂部から斜位に隆帯が施文されることで、口縁部文様帯が三角形に区画される。14は栃木県佐野市出流原小学校内遺跡出土土器で、口縁部を横位に巡る隆帯と垂下する隆帯が貼付される<sup>(註7)</sup>。15は波頂部





1: 西裏遺跡 2~6: 黒袴台遺跡 7・8・22~28: 西田H遺跡 9・15: 田子平遺跡  
 10~12・20: 富作遺跡 13: 桑名邸遺跡 14: 出流原小学校内遺跡 16・17: 松ヶ平A遺跡  
 18: 砂出遺跡 19: 塩喰岩陰遺跡 21: 永光院浅ノ内遺跡 29: 竹之内遺跡

図3 縦位区画を有する土器

が丸みを帯びた4単位の波状口縁である。隆帯上には2本一組の棒状工具による押引文が施文されている。隆帯により4分割された区画には、同工具で押引文によるV字状に施文される、田子平遺跡25号土坑出土土器である。13は天栄村桑名邸遺跡<sup>(註8)</sup>から出土した斜位隆帯上に絡条体圧痕文を施す土器である。16・17は飯館村松ヶ平A遺跡<sup>(註9)</sup>出土土器で、2本一組の隆帯が特徴的である。

1～6・14は出流原式土器、7・8・10～12・15は常世1式土器、13・16・17は子母口式土器に相当すると報告されている。

**沈線をもつ土器** 18～21には、縦位の沈線を施文する資料を掲載した。18は大熊町砂出遺跡<sup>(註10)</sup>、19は西会津町塩喰岩陰遺跡<sup>(註11)</sup>、20は富作遺跡、21は長沼町（現 須賀川市）永光院浅ノ内遺跡<sup>(註12)</sup>出土資料である。18は6単位の波状口縁深鉢で、富作遺跡から出土した土器12とは、隆帯の有無の差異はあるものの文様構成が酷似している。18・20・21は波状口縁の内面に刺突が施され、19は平口縁の口唇部に刻みが観察できる。18・19は櫛歯状工具による縦位沈線、21は縦位の平行する波状沈線文が施文される。これらの縦位に施文された沈線から、横位にそれぞれの施文具による沈線が施文されている。21の口縁部には、口縁部に沿うように平行する波状沈線が施文されている。

沈線で縦位の区画文を施文する土器は、口縁部内面に刺突が認められる資料が多い。このことから、沈線により縦位区画を有する資料は、常世1式に相当する土器と見做されている。

**絡条体圧痕文をもつ土器** 22～28は西田H遺跡、29はいわき市竹之内遺跡<sup>(註13)</sup>出土土器である。23～25・27・29は、縦位の絡条体圧痕を施して、そこから横方向にのびるように横位多段の絡条体圧痕文が施文される。平行に施文される23・24・27・29、斜位に施文される25がある。いずれも土器片が小破片のため、明確な器形や文様構成は、はっきりしない。

横位多段構成となる絡条体圧痕文は、図2と類似する。しかし、横位に施文される条の間隔や段数などには、個体差が見られる。横位多段に絡条体圧痕文を施文する資料と縦位に絡条体圧痕文を施文する資料には、関連性がうかがえる。

## （2）横位多段の絡条体圧痕文について

図2土器を特徴づけるもう一つの主文様として、多段構成となる横位の絡条体圧痕文がある。常世1式期には、絡条体圧痕文が施文された資料の発見例が増加するようになる。福島県内においても、多くの遺跡で出土している。

会津地方では、磐梯町観音谷地遺跡<sup>(註14)</sup>、塩川町（現 喜多方市）南原遺跡<sup>(註15)</sup>、会津高田町（現 会津美里町）鷺沢道南遺跡<sup>(註16)</sup>、西会津町塩喰岩陰遺跡、伊南村（現 南会津町）久川城跡<sup>(註17)</sup>など。中通り地方では、福島市弓手原遺跡<sup>(註18)</sup>、福島市愛宕原遺跡<sup>(註19)</sup>、長沼町（現 須賀川市）ジダイ坊遺跡<sup>(註20)</sup>、小野町柳作B遺跡<sup>(註21)</sup>、小野町堂田A遺跡<sup>(註22)</sup>、西田H遺跡、矢吹町赤沢A遺跡<sup>(註23)</sup>、桑名邸遺跡、白河市泉川遺跡<sup>(註24)</sup>などがあげられる。田子平遺跡が所在する浜通り地方では、竹之内遺跡、砂出遺跡、飯館村岩下D遺跡<sup>(註25)</sup>、松ヶ平A遺跡などがあげられる。

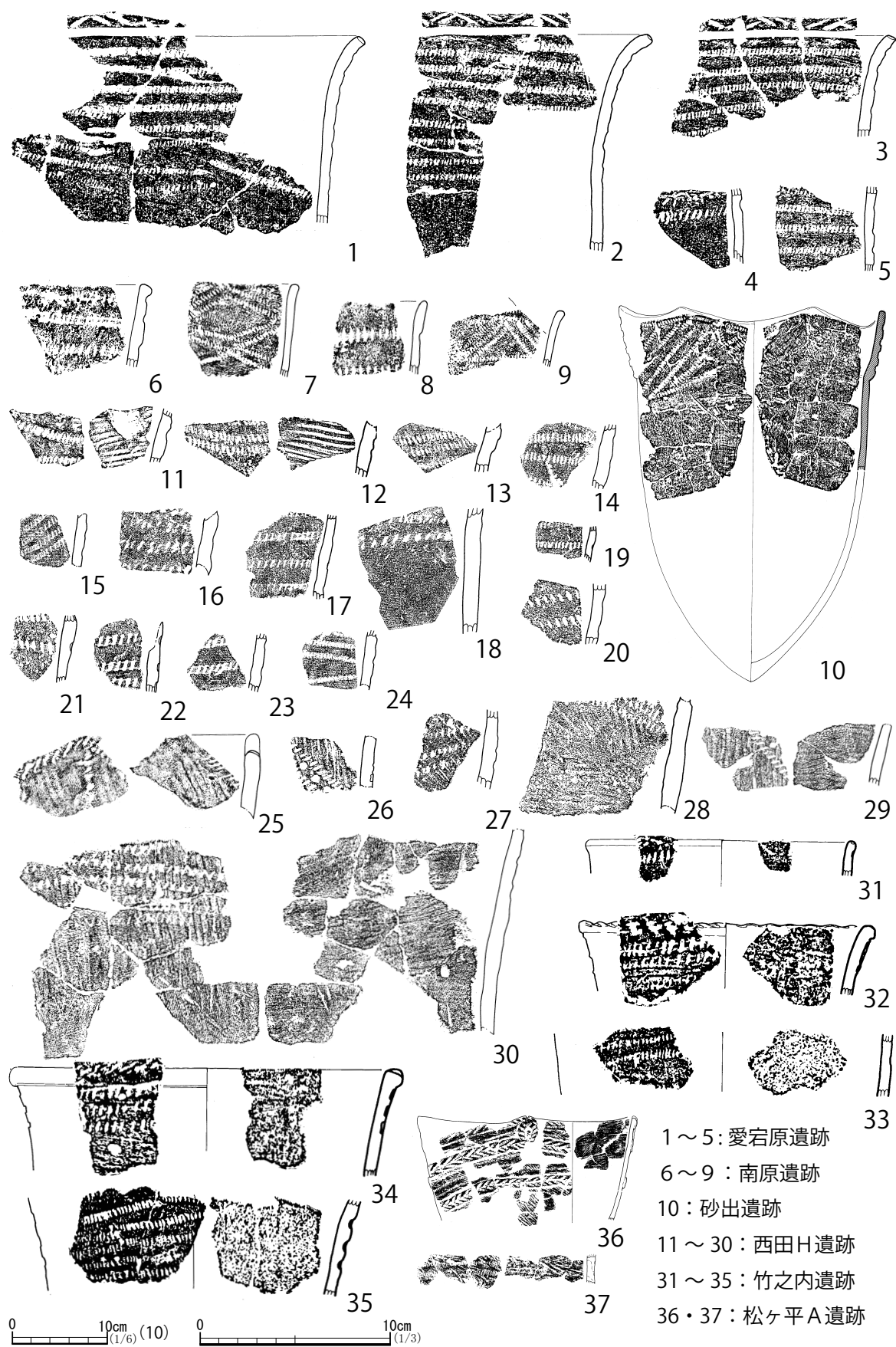


図4 横位多段の絡条体圧痕文を有する土器

図4には、上記の遺跡から出土した土器の一部を掲載した。特に絡条体圧痕文が横位多段構成となる資料を図示している。1～5は愛宕原遺跡出土土器である。平口縁で、外反する器形となる。口唇部には沈線により刻みが入る。1～3は同一個体であり、9条の絡条体圧痕文が確認できる。6～9は南原遺跡出土土器で、6・8は横位、7・9は菱形状に施文されている。10は砂出遺跡出土土器である。口縁部は波状となり、口縁に沿って絡条体圧痕文が施文され、口縁部文様帯には8条ほどの斜位の絡条体圧痕文が観察できる。11～30は西田H遺跡出土資料で、図示した資料以外にも横位多段構成となる資料が多数出土している。胴部が無文であるもの(11～24)、条痕を地文としたもの(25～30)の2種が認められた。これら2種の資料には、地文の有無以外に、施文される文様や施文具・胎土等に差異はなく、時期差は認められないと思われる。25は波状となる口縁に沿って絡条体圧痕文が施文される。体部には絡条体圧痕が複数条認められ、11～14・16～24・30のように横位に施文されるものと、15・26～29のように斜位に施文されるものがある。30は単軸絡条体第5類を押圧して「×」状に施文している。31～35には、竹ノ内遺跡出土土器を掲載した。32の口唇部には刻みが入る。36・37は松ヶ平A遺跡出土土器である。36は緩やかな4単位の波状口縁となる。波頂部直下には、馬蹄状の隆帯と体部に2条の幅広な隆帯が貼付されている。これらの隆帯上、口縁部に絡条体圧痕文が施文される。横位隆帯上には綾杉状に施文されるのが特徴的である。さらに口縁部と横位隆帯間、2本の横位隆帯間にも隆帯に平行するようにそれぞれ2条、3条の絡条体圧痕文が巡る。地文には条痕が観察できる。37にも横位の絡条体圧痕文が観察できる。

絡条体圧痕を有する土器は、県全域に分布していることが理解できる。また、横位多段の絡条体圧痕文土器には、縦位の絡条体圧痕文をもつ土器の一部も伴う可能性があるが、破片資料のみでは、明確に判断するのは難しい。しかし、縦位絡条体圧痕文が施文される土器には、横位の絡条体圧痕文も併存すると考えるのが良いであろう。報告の中で、これらの土器は、子母口式に併行する土器と想定されている。

## 4 編年的位置付け

前節では、図2土器の文様要素を縦位区画と絡条体圧痕の要素に分解して、類似事例から検討した。以下では、常世1式土器の研究史を基礎としながら、田子平遺跡出土土器の文様要素を手がかりに編年的位置付けを行いたい。

### (1) 常世1式土器の研究小史

塩川町(現 喜多方市)常世原田遺跡<sup>(註26)</sup>では、胎土に繊維を含有しない絡条体圧痕文土器が出土していない。富作遺跡における調査結果では、絡条体圧痕文が施文された土器は非常に少なく、さらに沈線文を主体とする土器群から、貝殻文や刺突文を主体とする土器群への変遷過程が想定されている。これらの調査例から、常世1式とされる土器の中でも時期差があるのではないかと推測されてきた。

常世式土器については、中村五郎氏により変遷案が示されている。田戸上層式併行の土器を

大火山期・五軒丁2類期・道德森2類期の3時期と常世式に区分けしている<sup>(註27)</sup>。さらに道德森2類期の土器群を大寺下層式・田戸上層式の最終末に併行させて、常世1式の編年的位置を子母口式の最も古い段階に訂正した<sup>(註28)</sup>。この中村氏の編年案に対して、領塚正浩氏は道德森2類期の土器群は、常世1式の範疇に含まれるとした<sup>(註29)</sup>。その後も中村氏は常世式土器の編年的課題について精力的に取り上げ、多くの論稿を執筆している<sup>(註30)</sup>。

芳賀英一氏は絡条体圧痕文が施文される土器について「常世1式に極めて近似するが、これに後続する一群と一応考えてよいものと考えられる。」と指摘している<sup>(註31)</sup>。領塚氏は常世1式の後続型式として、関東の子母口式に併行する土器を、松ヶ平A遺跡出土土器(図3-36)や竹之内遺跡出土土器を想定している<sup>(註32)</sup>。

多くの先学の研究により、概ね沈線や刺突文を施す土器群より絡条体圧痕文を施文する土器群は、常世1式の中でも後出する土器群と捉えられている。

## (2) 縦位区画の継続性

図3で示したように、常世1式にも縦位区画が散見された。縦位区画の出自に関しては、井上賢氏が子母口式<sup>(註33)</sup>、小笠原永隆氏は田戸上層式新々段階<sup>(註34)</sup>に見出すことができると捉えた。また小笠原氏は同論中において、縦位区画をもつ資料ともたない資料については、系統の違いを想定している。これらの論考は、井上・小笠原両氏ともに千葉県をフィールドとして論じていることから、福島県内の様相にそのまま当て嵌められるかについては、慎重に判断すべきであろう。しかし、隆帯を含む縦位区画文は、常世1式期を通じてわずかながらも出土していたことは明らかである。縦位区画を有する土器は、各遺跡において出土量は少ないものの、連続していたのである。常世1式の貝殻を施文具とした腹縁圧痕や刺突、さらには半截竹管工具による刺突や櫛歯状押引文による横位多段の文様構成が、より簡便な絡条体を用いた圧痕文に置換されたと考えてもよいであろう。この施文傾向を重視するならば、縦位に沈線を施文する土器や隆帯上に押引文を施文する土器よりは、隆帯上に絡条体圧痕文を施文する土器と縦位の隆帯圧痕文を施文する土器は後出すると考えられる。以上のことから、縦位区画に見られる施文法の差異にも、沈線文から刺突文そして絡条体圧痕文への変遷が看取できる。

## (3) 田子平遺跡出土土器の位置付け

絡条体圧痕文は子母口式土器のメルクマールとされてきたが、近年再整理され報告された資料<sup>(註35)</sup>により、子母口式土器の多彩な様相が明らかになってきた。子母口貝塚・大口坂貝塚の資料中には、細隆起線・隆線・隆帯・刺突文・沈線・絡条体圧痕文などの多様な文様要素が認められ、田戸上層式に出自が求められる資料、さらには野島式成立に至る文様変遷過程の一端が垣間見える資料として再評価されている。

子母口式の絡条体圧痕文の出自に関して、岡本東三氏は東北地方南部の子母口式が竹之内・松ヶ平A両遺跡の資料であるならば、常世式の文様要素の一つである絡条体圧痕文は、子母口式の絡条体圧痕文の出自とも考えられるとした<sup>(註36)</sup>。しかし、図4-36・37は、子母口式の

文様要素に横位多段の絡条体圧痕文を付加したものと考えられ、むしろ子母口式と絡条体圧痕文をもつ常世1式土器が併行した傍証ではないかと考えられるのである。

常世1式の文様要素の1つである横位多段の絡条体圧痕文が施文されることから、子母口式と横位多段の絡条体圧痕文が施文される土器群とは併行関係にあるか、少なくとも子母口式土器が絡条体圧痕文をもつ常世1式土器の影響を受けたものと考えられる。しかし、県内において関東地方の子母口式に相当する土器の出土量は少ない。東北地方南部の子母口式に相当する土器は、図4の横位多段構成となる絡条体圧痕文土器群ではないだろうか。

以上の事などから、口縁部に縦位隆帯をもち横位多段の絡条体圧痕文が施文される図2土器及び図4の資料は、関東地方の子母口式に併行した土器なのではないかと考えている。横位多段の構成を採用する絡条体圧痕文土器、さらに縦位に絡条体圧痕文をもつ土器も含めて、子母口式に併行した関係性にあると考えられる。

## 5 おわりに

今回、検討した田子平遺跡出土土器については、比較検討した資料も限られるため、従来知られていた土器型式との対比を試みることに、必ずしも十分な資料数とは言えない。さらに分布事例や層位的検証においても、ほとんど無い状況での現段階における編年的位置付けである。本資料の現段階で考えられる年代観を、試論的な意味も込めて簡潔に想定することを試みたつもりである。

最後に本資料に関して、筆者の力不足により検討できなかったいくつかの問題点が残る。それを列挙して了することとしたい。

①分布圏の問題：これまでのところ、図2の土器のように文様構成が明らかであり、かつ器形が完全に復元できる資料は、明確な出土例として田子平遺跡での発見例のみである。このような土器が群として存在するのか、はたまた、存在するのであれば分布圏はどの圏域であるのかを明らかとしたい。本報告では、東北地方北部を含む県外資料までを吟味することはできなかった。

②層位的出土例の問題：本資料は遺構に伴って出土するなど良好な出土状況ではあったが、詳細な層位的調査や併行する他の土器群とのクロスチェックが行えなかった。類例資料の増加による層位的事実による相対的な客観的事例の把握が必要である。

③型式の問題：多くの先学の研究により、概ね沈線や刺突文を施す土器群より絡条体圧痕文を施文する土器群は、常世1式の中でも後出する土器群と捉えられてきた。図2・図4の土器を含めた横位多段構成となる絡条体圧痕文の土器群について、常世1式と呼ぶべきかという問題が残る。研究史による常世式土器の来歴も含めて考慮すべきと考える。

〈註〉

（註1）山岸英夫・吉野滋夫・今野徹・三浦武司・中野幸夫 2010 「田子平遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 58』福島県教育委員会

- (註2) 福島県文化財センター白河館では、プロムナードギャラリーにて「ふくしまの宝物」と題してミニ展示を行っている。年に3回程度、学芸員が持ち回りで資料を選出し、展示替えを行っている。
- (註3) 斉藤弘 1996 「西裏遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告書 第261集』栃木県教育委員会
- (註4) 芹沢清八他 2001 「黒袴台遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告書 第180集』栃木県教育委員会
- (註5) 山元出・横須賀倫達・三浦武司 2005 「西田H遺跡」『こまちダム遺跡発掘調査報告3』福島県教育委員会
- (註6) 鈴鹿良一 1981 「富作遺跡」『広域農業開発事業 阿武隈地区遺跡分布調査報告(Ⅰ)』福島県教育委員会
- 田中敏他 1986 『富作遺跡発掘調査概報 福島県立博物館調査報告概報第13集』福島県教育委員会
- (註7) 矢島俊雄 1984 『出流原小学校内遺跡発掘調査報告書』佐野市教育委員会
- (註8) 石本弘・香川慎一他 1990 「桑名邸遺跡(第2次)」『国営総合農地開発事業 矢吹地区遺跡発掘調査報告6』福島県教育委員会
- (註9) 鈴鹿良一・松本茂他 1984 「松ヶ平A遺跡(第2次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告VI』福島県教育委員会
- (註10) 馬目順一他 1984 「砂出遺跡」『大熊町史』第2巻 資料原始・古代・中世
- (註11) 芳賀英一・小暮伸之他 1994 「塩喰岩陰遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告書25』福島県教育委員会
- (註12) 丸山泰徳他 1987 「永光院浅ノ内」『昭和61年度県営圃場整備事業関連遺跡調査報告 永光院浅ノ内・ジダイ坊・京塚』長沼町教育委員会
- (註13) 馬目順一他 1982 『竹之内遺跡』いわき市教育委員会
- (註14) 中村五郎他 1976 『磐梯町の縄文土器』磐梯町教育委員会
- (註15) 芳賀英一 1992 「塩川町南原遺跡の縄文土器」『福島考古』第33号 福島県考古学会
- (註16) 本間宏・井憲治 1992 「鷲沢道南遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告XIV』福島県教育委員会
- (註17) 山崎四朗他 1991 「久川城跡発掘調査報告書Ⅲ」伊南村埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
- (註18) 山内幹夫・山岸英夫・大河原勉 佐藤啓 1997 「弓手原A遺跡(第2次調査)」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅲ』福島県教育委員会
- (註19) 丸山泰徳・新堀昭宏・堀江格他 1989 「愛宕原遺跡」『昭和63年度市道原宿愛宕原1号線建設工事関連遺跡調査報告』福島市教育委員会
- (註20) 前景註12と同じ。
- (註21) 吉田功・國井秀紀・小暮伸之・三浦武司 1999 「柳作B遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告4』福島県教育委員会
- (註22) 吉野滋夫 横須賀倫達 2005 「堂田A遺跡」『こまちダム遺跡発掘調査報告3』福島県文化財調査報告書第424集 福島県教育委員会
- (註23) 福島雅儀・佐藤啓・福田秀夫・横須賀倫達 2001 「赤沢A遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺

跡発掘調査報告 10』福島県教育委員会

(註 24) 木本元治・八巻一夫他 1973「泉川遺跡」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告 I』福島県教育委員会

(註 25) 松本茂 1986「岩下D遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅷ』福島県教育委員会

(註 26) 福島県 1964『福島県史』第6巻資料編1 考古資料

森幸彦 1999『常世原田遺跡－吉田格氏昭和23年調査資料－』福島県立博物館

(註 27) 中村五郎 1983「東北地方南部の縄紋早期後半の土器編年試論」『福島考古』第24号 福島県考古学会

(註 28) 中村五郎 1986「東北地方の古式縄紋土器の編年－福島県内の資料を中心に」『福島の研究』第1巻 地質考古編 清文堂出版

(註 29) 領塚正浩 1997「常世式土器の再検討－常世1式土器の成立過程と編年的位置をめぐって」『シンポジウム「押型文と沈線文」本編』長野県考古学会

(註 30) 中村五郎 1997「福島県内の縄文早期土器研究の諸問題」『福島考古』第38号 福島県考古学会

中村五郎 2002「常世式土器から槻木1式土器まで」『福島考古』第43号 福島県考古学会

(註 31) 前掲註15と同じ。

(註 32) 前掲註29と同じ。

(註 33) 井上賢 2010「野島1式土器の成り立ち－区画文間充填手法の確立－」『土器型式論の実践的研究』千葉大学大学院人文社会科学部研究科研究プロジェクト

(註 34) 小笠原永隆 2014「縄文時代早期子母口式土器に関する一考察－曲線状となる細隆線紋を中心として－」『土器型式論の実践的研究Ⅱ』千葉大学大学院人文社会科学部研究科研究プロジェクト

(註 35) 金子直行他 1992「子母口貝塚資料 大口坂貝塚資料 山内清男考古資料5」『奈良国立文化財研究所史料』第35冊

(註 36) 岡本東三他 1994『城ノ台南貝塚発掘調査報告書』千葉大学文学部考古学研究室

#### 【参考文献】

山内清男 1939～1941『日本先史土器図譜』1967復刻版 先史考古学会

#### 【挿図出典】

- ・図1…註1文献より転載。
- ・図2…註2文献より加筆して転載。写真は、筆者が撮影。
- ・図3…註2～9・10～14をもとに筆者が作成。
- ・図4…註5・9・11・14・15・20をもとに筆者が作成。